

# 大祓詞

高天原に神留り坐す 皇親神漏岐 神漏美の命以ちて 八百萬神等を

神集へに 集へ賜ひ 神議りに議り賜ひて 我が皇御孫命は

豊葦原水穗国を 安國と平けく知ろし食せと 事依さし奉りき 此く依

さし奉りし国中に 荒振る神達をば 神問はしに問はし賜い 神掃ひに

掃ひ賜いて 語問ひし磐根 樹根立 草の片葉をも語止めて 天の磐座

放ち 天の八重雲を 伊頭の千別きに千別きて 天降し依さし奉りき

此く依さし奉りし四方の國中と 大倭日高見國を安國と定め奉りて

下つ磐根に 宮柱太敷き立て 高天原に千木高知りて 皇御孫命の瑞の

御殿仕へ奉りて 天の御蔭 日の御蔭と隠り坐して 安國と平けく知ろ

し食さむ 國中に成り出でむ天の益人等が 過ち犯しけむ種種の罪事は

天つ罪 國つ罪 許許太久の罪出でむ 此く出でば 天つ宮事以ちて

天つ金木を本打ち切り 末打ち断ちて 千座の置座に置き足らはして

天つ菅麻を 本刈り断ち 末刈り切りて 八針に取り辟きて 天つ祝詞

の太祝詞事を宣れ

此く宣らば 天つ神は天の磐門を押し披きて 天の八重雲を伊頭の千

別きに千別きて 聞こし食さむ 國つ神は高山の末 短山の末に上り坐

して 高山の伊褒理 短山の伊褒理を搔き別けて聞こし食さむ 此く聞

こし食してば 罪と云ふ罪は在らじと 科戸の風の天の八重雲を吹き放

つ事の如く 朝の御霧 夕の御霧を 朝風 夕風の吹き払ふ事の如く

大津辺に居る大船を 舳解き放ち 艦解き放ちて 大海原に押し放つ事

の如く 彼方の繁木が本を 焼鎌の敏鎌以ちて 打ち掃ふ事の如く

遺る罪は在らじと 祓へ給ひ清め給ふ事を 高山の末 短山の末より

佐久那太理に落ち多岐つ 速川の瀬に坐す瀬織津比賣と云ふ神 大海原

に持ち出でなむ 此く持ち出で往なば 荒潮の潮の八百道の八潮道の

潮の八百會に坐す速開都比賣と云ふ神 持ち加加吞みてむ 此く加加吞

みてば 氣吹戸に坐す氣吹戸主と云ふ神 根國 底國に氣吹き放ちてむ

此く氣吹き放ちてば 根國 底國に坐す速佐須良比賣と云ふ神 持ち佐

須良ひ失ひてむ 此く佐須良ひ失ひてば 罪と言ふ罪は在らじと

祓へ給ひ清め給ふ事を 天つ神 國つ神 八百萬神等共に 聞こし食せ

と白す